

## CONNECTEDkind — あそびがひらく無意識の扉

萱原真希

世界中で愛されているサン＝テグジュペリの『星の王子さま』は、一枚の絵にまつわる苦い記憶から始まります。物語の語り手である飛行士は、子どもの頃、象を丸呑みにして消化しているウワバミ（蛇）の絵を描きました。しかし、その自信作を大人たちに見せても返ってくるのは、「帽子だね」という素っ気ない反応ばかりです。彼は、ウワバミのお腹の中が見える透視図まで描いて説明を試みますが、周りの大人たちは「そんなことより地理や計算の勉強をしなさい」と繰り返すだけでした。彼らの創造性の欠如に落胆した飛行士は、こうして絵を描くことをやめてしまいます。

かつての私にも、自由に筆と想像力を駆使していた時代がありました。小学生の頃、英会話教室でアルファベットの筆記体を習った時のことです。ホワイトボードに先生が書いてくれたお手本。その流れるような曲線が、私には単なる文字という記号ではなく、美しい絵のように見えました。私はそのひらめきのままにマーカーを手に取り、教室のホワイトボードいっぱいに「落書き」を始めました。先生が目を離していた束の間、私はあっという間にボードを埋め尽くすほどのストーリーを描き上げていました。その時、先生は私を叱るどころか、「あなたには絵描きの才能があるのね」と、私の想像の世界を絶賛してくれました。

### 烙印とロゴス——描けなくなった自分

それなのに、いつの間にか私は絵を描くことをやめてしまいました。いつ、なぜ描けなくなったのか、明確な理由はありません。「大人になれば絵を描かなくなるのは自然なことだ」と、思い込んでいたのかもしれませんが、けれど、一つだけ決定的な出来事がありました。それは私が大人になり、友人の幼い子どもにアニメのキャラクターを描いてほしいとせがまれた時のことです。私は渋々ペンを取り、記憶を頼りに描いてみました。ですが、子どもの目は正直です。出来上がった私の絵を見て、その子は「…なんか、ちがう…」と呟き、泣き出してしまいました。

「ああ、私はもう絵が下手くそなんだな」と、自分で自分に烙印を押した瞬間でした。それ以来私は、自分の子どもたちが生まれた後も一切絵を描いてあげたことはありません。その役割はすべて夫に任せていました。子どもたちも何度かは私にせがむことがありまし

たが、やがて「お母さんは絵が苦手だから仕方ないね」と、あきらめてくれるようになりました。それでいいと思っていました。誰にでも不得意なことがあって当然です。「私はロゴスの人間なのだから、絵という感情表現を持たなくても困ることはない」と、言い訳をしていました。

その傾向は、大学院に入学し、再び研究生生活を始めたことで決定的なものとなりました。アカデミアは強固なロゴスの世界です。専門用語が飛び交い、緻密な論理を組み立て、身体を絞るようにして論文を書く日々。そこにはもちろん知的な興奮があります。しかし、常に頭ばかりが大きくなって、身体感覚が置き去りにされているような居心地の悪さが付きまわっていました。

### 影がひらく——CONNECTEDkind との出会い

そんな私が、ある授業で「CONNECTEDkind」に挑戦することになったのです。それは、落ち葉や花びらといった自然物と、そこに落ちる影の写真を利用し、自由に想像の世界を描き加えるアクティビティです。「絵なんて絶対に描けない」という強い苦手意識を持っていた私は、もちろん身構えていました。ところが、いざ開始してみると、不思議なことに、自由に手を動かしている自分がいました。思いついたイメージをそのまま表現している自分。その感覚はまさに、英会話教室のホワイトボードいっぱいに落書きをした、あの子ども時代のものでした。「私でもまだ絵が描けるんだな」という驚き。それは、ずっと昔に置き去りにしてきた感覚との再結合の瞬間でした。



授業で描いた実際の絵（iPad を使用）

なぜ、絵に苦手意識のあった私が、CONNECTEDkind ではこれほど自由に描けたのでしょうか。ロシアの心理学者ヴィゴツキーは、想像力を「すでにあるものを組み合わせる活動」だと考えました。私たちは何もなかったところから魔法のように新しいものを生み出すわけではありません。過去の経験や記憶を一度バラバラにし、新しい順序で組み合わせることで、再想像した世界をつくり出すのです。CONNECTEDkind において、目の前にあるのは「自然物の影」という現実のかけらです。それは、何に見えるか答えのないシミのように、あいまいで、多様な形を内包しています。その影がきっかけとなって、私の内側に眠っていたイメージの記憶が刺激され、頭で考えることを飛び越えて、心の奥から形を引き出したのでしょう。そこには「上手に描かなければならない」というプレッシャーが入り込む余地はありません。ただ素直に影が語りかけてくる形に耳を澄ませ、それに線を描くだけです。それは受け身のように、実はとても能動的でクリエイティブな「あそび」の時間なのです。

### 無意識の扉——出会いというコンステレーション

日本の臨床心理学の草分けである河合隼雄は、私たちの心には「意識」と「無意識」があり、その間にはイメージが行き交う世界が広がっていると言いました。私たちは普段、「意識」という狭い領域で生きています。しかし、「あそび」という自由な機会の中で想像の世界に身をゆだねる時、私たちは意識の奥底にある広大な「無意識」の領域へと降りていくことが可能となります。CONNECTEDkind で私が体験したのは、まさにこの心の深みへのプロセスでした。自然物と影に、自分自身の内的なイメージを重ね合わせる行為。それは、自分という個人の殻を破り、より深く、みんなとつながっている普遍的な場所（普遍的無意識）へと続く扉を開く鍵だったのです。

この感覚が確信に変わったのは、それから二年後、CONNECTEDkind の発案者であるラウラさんにお会いした時でした。ラウラさんと私はすぐに心が通じ合いました。言葉を交わすよりも早く、お互いの存在の深い部分が響き合うのを感じたのです。自分たちの年代も同じで、子どもたちの年齢もすっかり同じ。彼女が日本という土地に深いインスピレーションを感じていた一方で、私は彼女の持つ豊かな自然観や身体性に深く敬服しました。言葉の壁も、文化の違いも超えて、私たちは一瞬で友達になりました。「きっと前世も友達だったんだろうね」——そんなふうに笑い合えたのは、私たちが互いに、理屈の世界だけでは捉えきれない「何か」を大切にしていることを、言葉にしなくても理解し合えたからでしょう。

河合はまた、一見関係のない出来事や人々が、ある時点で意味のあるパターンとして結びつく現象を、「コンステレーション（布置）」という言葉で紹介しました。夜空の星をつなぎ合わせて星座を作るように、人生の出来事もまた、つながりを持って現れます。私にとって、子どもの頃の落書き、絵で子どもを泣かせてしまった出来事、ログス生活での閉塞感、CONNECTEDkind との出会い、そしてラウラさんとのつながり、それらすべてが一つの「コンステレーション」でした。私たちは皆、バラバラに存在しているわけではありません。心の深い層、みんながつながっている「無意識」の場所において、根っこでつながっているのです。

かつて、ウワバミの絵を誰にも理解してもらえなかったあの飛行士は、砂漠の真ん中で不思議な男の子と出会いました。「ヒツジの絵を描いて」とせがんでくるその子に応えているうちに、彼は不自由さから解放され、いつの間にか自然に絵を描いてしまいます。「本当に大切なものは、目に見えないんだよ」と王子さまから教えてもらった彼は、物語の最後、砂漠の絵を描いて読者に願いを託します。もしこの場所へ行き、王子さまに会えたなら、どうか私に教えてほしい、と。

私にとってのラウラさんは、まさにあの男の子でした。ログスで埋め尽くされた日々を過ごす私の前に、彼女は舞い降りてきました。そして、自然物の写真を差し出して、こう教えてくれたように思うのです。「大切なものは目に見えないから、自由に描いていいんだよ」と。描くことを通じて、自分の心の奥底とつながること。そして言葉を超えて、世界中の誰かと心を通わせること。そんな、目には見えないけれど確かな感覚を、彼女は私に思い出させてくれました。

ラトビア生まれの「星のお姫さま」と私が次に会える日はいつなのかを思うだけで、心がワクワクします。ですが、それまでは CONNECTEDkind を通じて、私たちはいつでもつながることができます。無意識の扉を開いてみれば、そこにはいつでも、豊かな自然物と影の世界が待っているからです。

#### <参考文献>

- ・ カイヨワ (Caillois, Roger) 『遊びと人間』 多田道太郎・塚崎幹夫訳、講談社（講談社学術文庫）、1990年。
- ・ 河合隼雄 『影の現象学』 講談社、1987年。

- ・ 河合隼雄『無意識の構造（改版）』中央公論新社，2017年。
- ・ ホイジンガ（Huizinga, Johan）『ホモ・ルーデンス（改版）』高橋英夫訳，中央公論新社，2019年。
- ・ ヴィゴツキー（Vygotsky, Lev S.）『子どもの想像力と創造（新訳版）』広瀬信雄訳，福井研介，新読書社，2002年。